

西方淨土變の白描畫

Stein painting 76, P.2671V の解釋について

大西磨希子

1. はじめに

西方淨土變とは、阿彌陀の西方淨土の場景を造形化したもので、敦煌莫高窟に初唐期以降の大畫面の壁畫が多數現存するほか、藏經洞からも絹本畫が発見されている。藏經洞遺物の中には、こうした西方淨土變の一部や、その外縁に付加される『觀無量壽經』（以下『觀經』）所説の圖を描いた白描畫が數點含まれている¹。

西方淨土變には形式上、淨土變のみからなるタイプと、その外縁に『觀經』所説の序分（太子阿闍世による父王頻婆娑羅と母后韋提希の幽閉物語、未生怨説話）と十六觀（阿彌陀淨土に關する十六の觀想法）の圖を付加したタイプの二種がある。初唐期の作例は前者に屬し、盛唐期になって後者の作例が出現する。それゆえ藏經洞發現の白描畫にも、淨土景部分に關するものと、外縁部分のものとが存在する。これらについて従來の研究では一般に、壁畫の下繪と解されてきた²。しかし、これらを果たして壁畫制作を目的とした下繪と見なしてよいものかについては疑問がある。

¹藏經洞から發見された、西方淨土變に關する白描畫には、本稿で扱う Stein painting 76 と P.2671V のほかに、淨土變部分を描いた P.4514(16) と P.4518(37) がある。沙武田『敦煌畫稿研究』（民族出版社、2006 年、109-119 頁）。Fraser, Sarah E., *Performing the Visual*, California: Stanford University Press, 2004, pp.54-68. その他フレイザー氏は、P.2868V の右半を『觀經』の十六觀圖と解されたが（前掲 *Performing the Visual*, pp.618-960）、沙氏は十六觀圖ではなく藥師淨土變の十二大願圖であると指摘しておられる（前掲『敦煌畫稿研究』63-69 頁）。

²前掲注 1 フレイザー書および沙書など。なお、藏經洞から發見された白描畫と莫高窟壁畫との關係について、最初に着目されたのは秋山光和氏であり、同氏は勞度叉闍聖變などに關する一連の研究を發表しておられる。秋山光和「敦煌本降魔變（牢度叉闍聖變）畫卷について」（『美術研究』187、1956 年）。同「敦煌における變文と繪畫——再び牢度叉闍聖變（降魔變）を中心に」（『美術研究』211、1960 年）。同「彌勒下生經變白描粉本（S 二五九 V）と敦煌壁畫の製作」（『西域文化研究』6、1963 年）。同「牢度叉闍聖變白描畫本（Pelliot Tibétain 1293）と敦煌壁畫」（『東京大學文學部 文化交流研究施設研究紀要』2・3、1978 年）。その他、楊泓氏にも敦煌遺書中の白描畫に關する論考がある。楊泓「意匠慘淡經營中——介紹敦煌卷子中的白描畫稿」（『美術』1981 年第 10 期）。

そこで小論では、これら西方淨土變に關する白描畫のうち、文書を伴い制作年代の手掛かりを有する外縁部分の二點（Stein painting 76、P.2671V）を對象に、内容と制作年代を概觀し、そのうえで現存する敦煌莫高窟や榆林窟の壁畫および藏經洞發見の絹本畫との比較を行い、壁畫制作と粉本という觀點から、この問題について検討してみたい。

一、Stein painting 76³の内容と制作年代

本圖は本來別々の三紙を貼り合わせたもので、中央の一紙は手紙文書「甲戌年四月沙州丈人鄧定子妻鄧慶連致肅州僧李保祐狀」である。各紙の内容を、右から順にみていくと、次のようになる（圖1）⁴。括弧内は現状での天地を示す。

【表面】

〔第一紙〕『觀經』序分圖、仙人斬殺と逐兔からなる未生怨因緣圖、十六觀圖を描く（倒置）。

〔第二紙〕手紙文書「甲戌年四月沙州丈人鄧定子妻鄧慶連致肅州僧李保祐狀」（正置）。

〔第三紙〕維摩詰經變。『維摩經』「問疾品」にもとづく維摩詰の姿を畫面の向かって左半に描き、同「香積品」に説く化菩薩の香飯捧持・鉢飯無盡の場面などを描く（正置）。

【背面】

³この所藏番號は、大英博物館スタイン將來繪畫資料の目録番號である。スタインによる原番號は Ch.00144 であり、スタインの第二次中央アジア探檢報告書『セリンディア』第二卷にディスクリプションが收録されている。M. A. Stein, *Serindia*, Oxford: Clarendon press, 1921, vol.2, pp.966-967. 本文書の寫眞圖版は、ロデリック・ウィットフィールド編集解説『西域美術』2（講談社、1982 年、figs.86-88）および中國社會科學院歷史研究所他編『英藏敦煌文獻』14（四川人民出版社、1995 年、179-181 頁）に載せるほか、白描畫部分のみの圖版を *Serindia*, vol.4, pls. XCV, XCVII、および松本榮一『敦煌畫の研究』圖版篇（東方文化學院東京研究所、1937 年）圖 22b、54b に收める。

⁴本圖の圖樣解釋については、以下を参照。*Serindia*, vol.2, p.967. 前掲注 3 松本書 48-49 頁、143-156 頁。Arthur Waley, *A Catalogue of Paintings Recovered from Tun-Huang by Sir Aurel Stein, K.C.I.E.*, Delhi, London: Printed by order of the Trustees of the British Museum and of the Government of India, 1931, cat. no. LXXVI, pp.111-112. Roderick Whitfield and Anne Farrer, *Caves of the Thousand Buddhas: Chinese Art from the Silk Route*, New York: George Braziller, 1990, pp.92-93. 以上の諸氏は本圖を維摩變相とのみ解釋しているが、フレイザー氏と沙氏は、第一紙の表裏の主題が西方淨土變に關連する『觀經』序分圖と十六觀圖および未生怨因緣圖であることを指摘しておられる。胡素馨（Sara Fraser）「敦煌的粉本和壁畫之間的關係」（『唐研究』3、1997 年）438 頁。前掲注 1 フレイザー書、67-68 頁、119-123 頁。沙武田「S.P.76〈觀無量壽經變稿〉析」（『敦煌研究』2001-2）14-18 頁。前掲注 1 沙書、79-86 頁、164-165 頁。

〔第一紙裏〕『觀經』序分圖。阿闍世王による父、頻婆娑羅王の幽閉場面を描く（倒置）。

〔第二紙裏〕手紙の上書きの上に、維摩詰經變を描く。上書きは二行にわたり「沙州妻鄧慶連狀上／肅州僧李保友（祐）處」と記す。維摩詰經變は『維摩經』「問疾品」にもとづく文殊菩薩と聽聞衆を描く（正置）。

〔第三紙裏〕維摩詰經變。毘耶離城の城門や「方便品」の各國王子問疾の場面などを描く（正置）。

すなわち、第一紙は『觀經』に関わる内容を表裏に描いたもので、第二紙は手紙文書の反故を利用し、餘白の多い上書きの面に『維摩經』にもとづく圖相を描いたもの、第三紙は表裏に『維摩經』の圖を描いたものである。これらはいずれも一紙ごとの表裏は天地が一致しているが⁵、現状では表背面ともに第一紙が他の二紙とは天地が逆になる形で貼られている。これについては、粗忽に貼り合わせたようにもみえるが、第一紙（『觀經』関連の圖）と他の二紙（『維摩經』関係の圖）とは内容が異なるため、故意に向きを逆轉させたとも考えられる。

この手紙文書の内容や作成年代については、坂尻彰宏氏の研究に詳しい⁶。すなわち、本文書は沙州（敦煌）在住の鄧慶連なる女性から肅州（酒泉）の僧、李保祐に宛てた私信であり、作成年代については、文中に歸義軍期の官職である「知駝官」という語があらわれることから、本文書は歸義軍期（9世紀半ば～11世紀初め）のもので、その間の「甲戌年」とは854年、914年、974年のいずれかにあたる。しかも文中に甘州ウイグルとの紛争状況を示す内容が記されていることから、914年ないしは974年の可能性が考えられるという。さらに同氏は、本文書の折り痕や上書きから、本文書は草稿ではなく実際に手紙として使用されたものであることを明らかにされている。また、第二紙裏の文殊菩薩圖の墨線はテキスト（手紙文書の上書き）の上に描かれていることから、白描畫は明らかに手紙文書より後に描かれたものであるという。したがって、本文書の白描畫は、914年ないしは974年以降に描かれたものということになる⁷。

本文書を他の藏經洞遺物とともに収集したスタインは、彼の第二次中央アジア探検報告書『セリンディア』における藏經洞將來品リストの中で、本圖を「佛教に

⁵第二紙は、上書きが手紙の本文に對して逆方向に記されているが、白描畫は手紙本文と同じ向きに描かれている。そのため、第二紙の白描畫は、上書きの文字の向きに逆らうように描かれている。

⁶坂尻彰宏「大英博物館藏甲戌年四月沙州丈人鄧定子妻鄧慶連致肅州僧李保祐狀」（『敦煌寫本研究年報』第6號、2012年3月）。

⁷筆者は舊稿において本圖の制作年代を914年以降としていたが（拙稿「中唐吐蕃期の敦煌十六觀圖」『佛教學部論集』95、2011年、表3）、ここに注して訂正しておきたい。

關する粗いスケッチで覆われた紙卷、恐らくはより大きな構圖のためのデザイン」⁸とみなし、本圖を壁畫などの下繪の一種と解している。同様にサラ・フレイザー（Sara E. Fraser）氏も、本圖の配置が粗雑で圖像に粗密あり描線も簡略であるとしながら、やはり本圖を壁畫の粉本と見なしている⁹。一方、ジェーン・ポータル（Jane Portal）氏は本圖に關する短い解説の中で、「これらの白描が畫僧の繪の練習に描かれたのか、現存していない本畫のための習作であったのかは判断できない」と述べ、下繪ではなく練習のための繪という可能性も指摘しているが、判断は保留している¹⁰。しかし沙武田氏は、本圖の表現が細部を省いた大まかなもので配置が亂れ混み合っているのは壁畫の下繪（底稿）としての性質の表れであると捉え、やはり本圖を壁畫の下繪と解している¹¹。すなわち本圖に關しては、練習のためのスケッチという可能性も部分的には指摘されているものの、ほとんどの場合、壁畫の粉本すなわち壁畫制作に先だって描かれた下繪の範疇で捉えられてきたといえる。

2. P.2671V の内容と制作年代

本圖は、中唐吐蕃期の敦煌において大量に書寫された『大乘無量壽宗要經』¹²の紙背文書のうゑに描かれている（圖2）。この『大乘無量壽宗要經』の寫本は卷首を缺き、後半から卷尾までの三紙分のみが残る¹³。本圖に關しては沙武田氏の研究があり、同氏は紙背文書についても録文を示しておられる¹⁴。ただし、沙氏の録文には一部に不備誤脱があるため、ここで改めて提示しておきたい。

【表面】『大乘無量壽宗要經』の後半部分。

⁸原文は、“Paper scroll covered with rough sketches of Buddhist subjects, prob. designs for larger compositions”（*Serindia*, vol.2, p.966）と記す。なお本圖に關する本文は、*ibid.* p.892 に收める。

⁹前掲注4 フレイザー論文、438 頁。なお同氏は、本圖が簡略である理由については、壁畫制作に携わった畫工が定型化した表現を十分熟知していたため、下繪は配置や内容を想起させるだけの簡単なもので十分であったのであらうと述べておられる。

¹⁰朝日新聞社事業本部文化事業部編『大英博物館の至寶展』朝日新聞社、2003 年、219 頁。

¹¹前掲注4 沙論文、および前掲注1 沙書、79-86 頁。

¹²本經は、書寫による様々な善報を説く。經題の「宗要」は「陀羅尼」の意。中唐吐蕃支配期の敦煌において夥しい數の漢譯本とチベット譯本が書寫された。漢譯の譯者は不明で、敦煌かその周辺の地域で8世紀末から9世紀初頭にかけて譯され流行したものとみられている。本經については、主に以下を参照。御牧克巳「大乘無量壽宗要經」（『講座敦煌7 敦煌と中國佛教』大東出版社、1984 年、167-172 頁）。上山大峻『敦煌佛教の研究』法藏館、1990 年、437-456 頁。

¹³『大正藏』19、83b 第4行-84c 第28行に相當し、そのうち最初の8行分は料紙の破損により缺失する。

¹⁴前掲注1 沙書、86-87 頁。

【背面：文書】

〔録文〕

- 1 尔時梵釋四天王及諸大衆□佛言世尊如是經典甚深
- 2 之議（義）若現在者當知如來卅七種助菩提法住
- 3 西東紫羅一疋白綾一疋紅綾一疋清綾一疋生□
- 4 疋□生一疋
- 5 河西都僧統 宋僧政 張僧政 梁法律 張法
- 6 律 康法律 經惠□ □嚴 信寂 惠通 法造
- 7 金剛藏 紅眞 紅莫 義深 □宗 靈□ 靈信
- 8 善才 慈照聰
- 9 勅河西節度使曹海滿書記之也
- 10 靈圖寺比丘龍辯 寺
- 11 靈圖
- 12 甲辰年五月廿□日
- 13 □□
- 14 黃（× 12 字）
- 15 想（× 14 字）
- 16 尚（× 17 字）
- 17 □□□□□□盒
- 18 □□□□□□親仗佛有如湜功德恆沙
- 19 歎□□□□□□奇妙光明照十方我適增（曾）

〔校異〕

〔第 1～2 行〕尔時梵釋至助菩提法住。『金光明最勝王經』卷三の經文の一部（『大藏經』16、417c）を抄出したもの。沙氏の録文はこの二行分を省略する。

〔第 3～4 行〕帳簿の類から抜き書きしたものか。沙氏の録文はこの二行分を缺く。

〔第 5～12 行〕僧録の抄書。

〔第 6 行〕惠通。惠道にも讀めるが不詳。

〔第 7 行〕紅莫。沙氏は第二字を判讀不可とするが、紅莫か。

〔第 8 行〕慈照聰。沙氏の録文は慈字を缺く。

〔第 9 行〕勅河西節度使。沙氏は勅字を缺く。

〔第 9 行〕曹海滿。沙氏は曹字について唐かとしている。誰を指すかは不詳。

〔第 10 行〕寺。沙氏は書に作る。次行の靈圖の二字と同じく寺字の輪郭を記す。

〔第 12 行〕廿□日。第二字は不詳。あるいは一か。

〔第 13～16 行〕習字。

〔第 17～19 行〕經文の一部か。沙氏の録文はこの三行分を缺く。

〔第 18 行〕親仗佛有如湜功德恆沙。出典不明。

〔第 19 行〕奇妙光明照十方我適增。『妙法蓮華經』卷六、藥王菩薩本事品第二十三の讚佛偈の部分（『大正藏』9、53c）。

【背面：白描畫】

用紙を縦に使用した縦長の畫面に、三紙に渡って未生怨因緣圖と『觀經』の序分圖および十六觀圖を描く。上部三分の一の區畫に十六觀圖を、残る下部に未生怨因緣圖と序分圖を描く。

本圖の制作年代の手掛かりとなるのは、裏文書の僧錄部分である。第 5 行に「河西都僧統」、第 9 行「河西節度使」の語が含まれることから、裏文書が歸義軍節度使の時期に『大乘無量壽宗要經』の紙背を利用して記されたものであることは明らかである。そのうえで第 12 行に記す「甲辰年」が何年であるのかが問題となる。これについて沙氏は、文中に出る靈圖寺が宋の天禧三年（1019）まで存続していた敦煌の大寺であること¹⁵、さらに第 10 行に「靈圖寺比丘龍辯」とあるのは、S.6526『四分律比丘戒本』奥書に「中和元年（881）弟子龍辯寫經□□」とあるのと同人物であることから、944 年であるとみなし、本圖を 944 年以降に描かれたものとされた¹⁶。しかし、この年代比定にはやや問題がある。

靈圖寺の龍辯は河西都僧統となった人物であり、その在世および都僧統在位の期間が竺沙雅章氏や榮新江氏により凡そ明らかにされている¹⁷。まず竺沙氏は、龍辯が僧官として現れるのは S.6781「丁丑年（917）梁課決算文書」に「都僧錄龍辯」とあるのが最も早く¹⁸、その後、海晏の都僧統時代の副僧統を経て、S.6417「清泰六年（939）金光明寺徒衆上座神威等衆請善力爲上座狀」¹⁹に都僧統への昇進が最初に確認されるとする。つぎに都僧統としての在位が最後に確認できるのは P.4638 の清泰四年（937）の「僧龍辯等上司空牒」「僧龍辯等謝司空賜物牒」「同獻物牒」

¹⁵ 李正宇「靈圖寺」（季羨林主編『敦煌學大辭典』上海辭書出版社、1998 年、629 頁）。

¹⁶ 前掲注 1 沙書、90 頁。

¹⁷ 竺沙雅章「敦煌の僧官制度」（『東方學報（京都）』31、1961 年、140-141 頁）。同『中國佛教社會史研究』同朋舎出版、1982 年、355-356 頁。榮新江「關於沙州歸義軍都僧統年代的幾個問題」（『敦煌研究』1989 年第 4 期。のち『歸義軍史研究』（上海古籍出版社、1996 年、287-289 頁）に再録）。

¹⁸ 『敦煌寶藏』51、516 頁。

¹⁹ 『敦煌寶藏』46、278 頁。

²⁰であるとされた。加えて、沙氏も挙げられた中和元年の S.6526『四分律比丘戒本』について竺沙氏は、比丘戒本は比丘となれば常に受持しなければならないものであり、具足戒を受けて比丘となる前後に書寫し備えておくべきものであったこと、また具足戒は二十歳になって受けるものであることから、881年に龍辯は二十歳前後であったと考えられるとし、龍辯の都僧統就任は七十を超えてからのことで、都僧統在位が確認できる 935～937 年當時には龍辯は七十四～六歳頃であり、恐らく在任數年足らずで世を去ったのであろうと推定された。

榮新江氏は、この竺沙氏の研究成果を受け継ぎ、彼の都僧統の在位期間の下限をのぼす新資料を發掘された。すなわち S.8583「天福捌年（943）河西郡都僧統龍辯勝」に「河西應管内外沙門都僧統龍辯」（圖 3）と記されていることから、943 年に龍辯はまだ都僧統の位にあったことを明らかにされた。該文書は末尾の日付の上に「河西都／僧統印」の朱印が捺されており、文書の正本であることが分かる点でも貴重である。榮氏はさらに、甲辰年（944）六月から十一月の間に記された P.2032V と、乙巳年（945）正月に記された P.2040 には、同じ「孔僧統」の百日齋のための施入が記されており、當該の「孔僧統」は 944 年に亡くなったとみられることから、この「孔僧統」が龍辯であった可能性を指摘しておられる。その場合、龍辯の死寂は 944 年後半ということになる。ただし榮氏は、「孔僧統」が龍辯時代の副僧統であった可能性もあるとし、沒年についてはなお判断を保留しておられる²¹。

さて、P.2671V の白描畫の年代判定の基準となる、僧錄箇所の「甲辰年」であるが、龍辯が 943 年までは健在であったことが確認できることからすれば、沙氏がみなされたように 944 年としてもぎりぎり許容できるかのようにもみえる。しかし、問題なのは本文書の僧錄において、彼が「河西郡都僧統龍辯」ではなく「靈圖寺比丘龍辯」と記されている点である。つまり本文書に抄書された僧錄は、龍辯の都僧統在任期のものではなく、就任以前のものだったのではないか。さらに、龍辯が 881 年に具足戒を受け比丘となったことも考え合わせれば、問題の「甲辰年」はおのずと 884 年に絞られる。したがって、本圖は 884 年以降に描かれたものと考えられよう²²。

²⁰ 『法藏敦煌西域文獻』 32、237-238 頁。

²¹ なお鄭炳林氏は、根據は示しておられないものの、龍辯の俗姓を「孔」とみなしておられる（鄭炳林『敦煌碑名贊輯釋』甘肅教育出版社、1992 年、356 頁）。假に、龍辯の俗姓が孔であったということが確認できれば、P.2032V や P.2020 に記す「孔僧統」はまさしく龍辯であったということになろう。後考に俟ちたい。

²² 本圖の制作年代について、筆者は舊稿において 944 年以降としていたが（前掲注 7 拙稿、表 3）、ここに注して訂正しておきたい。

本文書の白描畫について唯一考察を加えられた沙氏は、その繪としての性質について、壁畫の底稿であることは疑いを容れないとし、Stein Painting 76 の白描畫と同様、壁畫制作に先だってつくられた下繪とみなしている²³。

3. 敦煌壁畫および絹本畫との比較

敦煌藏經洞から發見された二點の白描畫（Stein painting 76、P.2671V）は、前者に關して畫僧による習作の可能性がわずかに言及された以外、すべて壁畫の下繪と解されてきた。とくに敦煌莫高窟の壁畫制作と下繪との關係を研究してこられたフレイザー氏と沙氏は、いずれも壁畫の下繪と解していた。しかし、果たしてそうであろうか。

これら二點の白描畫は、ともに文書の反故を利用しており、とくに P.2671V にいたっては、寫經の裏に經文の一節や僧錄の一部をランダムに抜き書きし、習字にも使用したうえに、重ねて描かれたものである。これに對して、藏經洞から見つかった他の白描畫のなかには、下繪として使用されたことが明らかなものはいくつか存するが（圖4）²⁴、それらが文書の反故を使用していないことは注意されてよい。

加えて、これら二點の白描畫の描寫は簡略で、描線も粗雑である。とくに Stein painting 76 は圖像が密集して描かれており、圖像の配置や順序は完全に無視されている。一方 P.2671V は縦長の畫面のなかに描かれているため、圖像の配置や順序は示されているが、その描線はきわめて稚拙でたどたどしい。こうした白描畫をもとに大畫面の壁畫を構成しうるとは、にわかには想像しがたい。さらにこの疑問を強くするのは、これらの白描畫よりも早い莫高窟や榆林窟の壁畫および藏經洞發見の絹本畫に、同種の圖像がすでに現れているという事實である。この點について以下、圖像の特徴が明瞭で比較同定しやすい『觀經』十六觀の各圖と、未生怨因緣圖とを例にとりながら、みていくことにしたい。

²³前掲注1 沙書、86-90 頁。

²⁴Ch.00226 (M.A. Stein, *Serindia*, vol.4, pl.XCIV.) は、線描に沿って小さな針穴が開けられており、下繪として制作されたものであることが確認できる。松本榮一「『かた』による造像」（『美術研究』156、1950 年）10-11 頁参照。幡畫の下繪であることが確認できる白描畫には、P.5018、P.3050、S.9137、P.4082、S.9137 がある（以上は、前掲注1 フレイザー書、131-158 頁を参照）。

3-1 『觀經』十六觀圖からみた Stein painting 76 と P.2671V

『觀經』十六觀とは、阿彌陀淨土を觀想する法を十六段階に分けて詳述したものであり、釋迦佛が未來の衆生のために韋提希夫人に向けて説くという形で示されていることから、十六觀圖では觀想の對象と、それに向かう韋提希夫人とが描かれる。『觀經』の記述に従えば、まず初觀の日想觀では觀想を始めるに際し方角を西に定めることが説かれ、ついで第二觀から第六觀では淨土の景物、第七觀から第十二觀では阿彌陀三尊を、残る第十三觀から第十六觀は、機根により異なる臨終來迎と往生淨土の場景を、それぞれ觀想する法が説かれる。

かように觀想の對象や順序が明確に規定されている十六觀ではあるが、敦煌の作例の多くは經典から乖離し、順序の亂れや圖像の重複、經文では解釋しがたい特異な圖像の出現といった現象が、盛唐期からすでに生じており、その傾向は時代を経るにつれ一層強くなる²⁵。表1～3は、莫高窟と榆林窟の壁畫および藏經洞發見の絹本畫に加え、今回考察對象とする白描畫2例を含めた計45例（盛唐：12例、中唐：22例、歸義軍期：11例）を對象に調査した結果をまとめたものである。そのうち圖像の時期的特徴を考えるうえで、とくに注目されるのは、網掛けを施した、經文に合致しない圖像である。

『觀經』の漢譯には現行本以外の異譯が存在していないことから、これら特異な圖像が何らかのテキストに依據して生み出されたとは考えにくく、寫し崩れによる産物であることは明らかである²⁶。そのうち表1～3では、盛唐期の作例にすでに出現している圖像を第一群、中唐吐蕃期の作例に新たに見出せるものを第二群、歸義軍期の作例にのみ見られるものを第三群として示した。それでは以下、問題の白描畫 Stein painting 76 と P.2671V に描かれた、經文に合致しない十六觀の各圖像について、以下順にみていきたい。

(a) 寶池の圓輪（圖5）

四周に磚を敷いた寶池の中に大きな圓輪を描くもので、P.2671V に描かれる。P.2671V では圓輪を花のように描いており變則的であるが、同様の圖像は莫高窟第320窟北壁など盛唐期の作例にすでに出現しており、中唐吐蕃期から歸義軍期にかけて繼承された圖像である。

²⁵ 拙稿「敦煌十六觀圖の分類と變遷」（『朝日敦煌研究員派遣制度記念誌』朝日新聞社、2008年、95-101頁）。前掲注7拙稿。

²⁶ 十六觀圖の寫し崩れについては、山部能宜氏の以下の論考に詳しい。Yamabe, Nobuyoshi. Transformation Tableaux “Based on” the Amitayus Visualization Sutra: Their Deviations from the Text, *Kristi*, vol.1, 2008; An Analysis of the Guanjin bianxiang Focusing on ㄈx-316: A Reconsideration of the Relationship between Art and Text, *Dunhuang Studies: Prospects and Problems for the Coming Second Century of Research*. St. Petersburg: Slavia, 2012, pp.299-309.

(b) 寶幢（圖 6）

Stein painting 76 と P.2671V の兩方に描かれる。やはり盛唐期に同様の圖像が出現しており、前者の寶幢は柱に傘狀飾りを重ねるタイプで、莫高窟の第 320 窟北壁や第 201 窟北壁のものと形状が近い。後者の寶幢は柱狀の太い銅を有し、莫高窟第 180 窟北壁のものに類似する。

(c) 僧形あるいは俗人形（圖 7）

合掌する人物像を描くもので、佛菩薩とは異なり頭光を伴わない。Stein painting 76 と P.2671V の兩方に描かれる。前者は蓮華座に、後者は低い牀座に坐す。やはり盛唐期に同様の圖像が出現している。

(d) 寶池に群生する蓮華（圖 8）

寶池の中に蓮華や荷葉が群生する様を描くもので、第二觀の水想觀から派生した圖像と思われる。P.2671V の表現は、盛唐期の莫高窟第 320 窟北壁など、同種の表現をとるものは多い。Stein painting 76 の圖は、寶池とその中の未開敷蓮華と荷葉を眞上から見たように描いており、受ける印象は異なるが、圖像の構成要素自體は盛唐期から出現しているものである。

(e) 寶瓶（圖 9）

P.2671V に描かれる。同様の圖像は盛唐期の莫高窟第 320 窟北壁などにすでに出現している。

(k) 湧雲（圖 10）

韋提希夫人の眼前に湧きあがる雲のみを描いたもので、壁畫・絹本畫をあわせても他に類例がなく、Stein painting 76 のみに描かれる。ただし第六觀の寶樓觀において、樓閣の下部に湧雲を描いた例が莫高窟第 172 窟南壁にあることから、こうした先行作例をもとに、湧雲部分のみを描いたものと考えられる。

以上から、Stein painting 76 と P.2671V にみられる、經文に合わない圖像は、いずれも盛唐期にすでに出現していたもので、中唐吐蕃期から歸義軍期にかけて繼承されていたものであったといえる。さらに同様のことは、經文に合致している圖像においても指摘できることから²⁷、これら二點の白描畫にみる十六觀圖は、圖像としての新奇性がなく、盛唐期以降に制作された、既存の作例を寫した可能

²⁷例えば、P.2671V にみられる佛立像は、盛唐期の莫高窟第 320 窟や第 172 窟などに描かれて以降、多くの作例に描かれているもので、本來は第十三觀を意圖した圖と思われる。また Stein painting 76 に描かれる、大きな未開敷蓮華に包まれた童子は、第十二觀圖に由來すると解されるもので、盛唐期の莫高窟第 66 窟や中唐期の榆林窟第 25 窟などにも描かれている。

性が高いといえよう²⁸。

3-2 未生怨因縁圖からみた Stein painting 76 と P.2671V

未生怨因縁圖とは、父母を幽閉するにいたった太子阿闍世の名の由來を示した圖である。この因縁説話は『觀經』やその注疏類には説かれず、『四分律』や『大般涅槃經』に記されている。すなわち、阿闍世の漢譯名が未生怨というのは、次のような経緯に由來するという。すなわち、かつて父王の頻婆娑羅には後嗣がなく、占いにより山中の仙人が亡くなれば王の子となると知ったことから仙人を殺させた。それによって生まれたのが阿闍世であるという²⁹。これにもとづき、仙人と頻婆娑羅王の對面、あるいは仙人斬殺の場面を描いたのが未生怨因縁圖である。加えて敦煌では、これら傳來の經典類には記載のない、もう一つの場面を加えることがある。すなわち、仙人が白兔に化し、それを王兵が逐うという場面である³⁰。これらの未生怨因縁圖は、敦煌の盛唐期の作例にはほとんど描かれておらず、中唐吐蕃期の壁畫や、それ以降の絹本畫に見出すことができ、Stein painting 76 と P.2671V にはいずれも描き込まれている。

まず Stein painting 76 からみていくと、山竝みと草庵を背景に、裸形に近い人物が背後に立つ兵らしき人物により後ろ手に縛られ、劍を手にしたもう一人の兵に頭髪を引っ張られている。その左斜め下には、右腕に鷹をのせた騎馬の兵士がおり、その前方には兔が走っている（圖 11）。一方、P.2671V では、旗を靡かせながら兔を逐う三人の騎馬兵と、その下に同じく旗をもった三人の騎馬兵と、その手前に草庵の中から仙人の手を掴む兵の姿が描かれている（圖 12）。

現存する壁畫や絹本畫のなかで未生怨因縁圖について圖版で確認できるものは、これら二點の白描畫を含め、計 13 例（盛唐期：1 例、中唐吐蕃期：5 例、歸義軍期：7 例）ある（表 4）。それらによれば仙人を捕える場面は、中唐吐蕃期の中葉ころを境に、仙人と頻婆娑羅王の對面を主とする表現（圖 13）から仙人を斬殺せんとする表現（圖 14-右）へ變化することが見て取れる。P.2671V の表現では、草庵から仙人を引きずり出すさまを描いており、現存作例中では他に類例をみないが、對面から斬殺へと表現が移る過渡期の圖像と解することができ、P.2671V の制作

²⁸十六觀圖に關していえば、Stein painting 76 と P.2671V の白描畫は、盛唐期の莫高窟第 172 窟南北壁、同第 320 窟北壁、同第 180 窟北壁のそれと近い。ただし、この二點の白描畫と全く合致する作例は現存していない。

²⁹未生怨因縁圖については、以下を参照。松本榮一「未生怨因縁圖相と觀經變」（『東方學報（東京）』4 號、1933 年）。同「觀經變相に於ける未生怨因縁圖相」（前掲注 3 松本書、45-59 頁）。

³⁰義山良忠の『觀經疏傳通記』（大正藏 57、576a）所引の『照明菩薩經』とその別記には、この仙人が死して兔身を受け、頻婆娑羅王の兵に逐われて死ぬ話を載せる。前掲注 24 松本論文を参照。

年代からみれば古い圖像を描いていると考えられる。Stein painting 76 は、劍を手にした兵と頭髮を掴まれた仙人を描いており、P.2671V よりは新しい圖像的特徴を示してはいるが、こうした圖像の出現自體は中唐吐蕃期の後半に遡ることから、やはり既存の圖像を寫したものであると考えられる。

同様に逐兔の場面でも、中唐吐蕃期中葉ころから鷹狩の姿であらわされるようになるという変化が見て取れる（圖 14-左）。ところが P.2671V には鷹が描かれておらず、仙人捕縛の場面と同様、古いタイプの圖像の特徴を示しており、本圖が既存作例を寫したものであることを示している。また Stein painting 76 は鷹狩姿を描いているが、その圖像は中唐吐蕃期の後半にはすでに出現していたものであり、やはり既存の圖像を繼承していることが確認できる。

したがって未生怨因縁圖の検討からは、P.2671V は中唐吐蕃期の前半に描かれた作例を、Stein painting 76 は中唐吐蕃期の後半以降の作例を寫した可能性がうかがえる。さらに、未生怨因縁圖のみならず十六觀圖においても、壁畫と絹本畫の間には圖像やその時代的變遷において共通性が見出せることから、これらの白描畫が手本とした作例は、壁畫だけでなく絹本畫であった可能性も十分に考えることができよう。

4. 白描畫——粉本か習作か

白描畫 Stein painting 76 と P.2671V について、十六觀圖と未生怨因縁圖の圖像を検討してきた結果、いずれもすでに存在している先行作例を後から寫し取ったものである可能性が高いことが指摘できた。では、なぜこの二點の白描畫について、従来は一般的に壁畫の下圖とみなされてきたのであろうか。その理由は恐らく、Stein painting 76 と P.2671V の白描畫が、同じ圖を繰り返していない點に求めることができよう。

藏經洞から發見された白描畫の中には、練習描きであることが明らかなものが含まれている。例えば、P.4522V は幞頭をつけた男性の頭部像を繰り返し描き、P.2002V は菩薩や俗人などの姿を大小取り混ぜながら描いている³¹。興味深いのは、そのいずれもが反故を利用しているという點である。前者は『無上金玄上妙道德玄經』卷二の紙背を再利用し、『^マ椎鎖宅法』第十とそれに關する住宅圖などを示した後、さらにその餘白に老若の男性頭像を大小計七三面にわたって描いてい

³¹P.4522V と P.2002V の白描畫に關しては、次を参照。Jao, Tsong-yi (饒宗頤) et al., *Peintures monochromes de Dunhuang (Dunhuang Baihua)*. Paris: 1978, École française d'Extrême-Orient. fascicule I, pp.19-20. fascicule II, pp.33-35. Fascicule III, pls. I-III, VIII-XI. 沙武田「敦煌寫真邈畫稿研究—兼論敦煌畫之寫真肖像藝術」(『敦煌學輯刊』2006 年第 1 期)。

る。P.2002V は『無上金玄上妙道德玄經』卷二の紙背に、圖の大きさに従って紙の縦横を自由に使い分け、仁王や菩薩、俗人男女の全身像や頭部像を大小様々に描いている。それらのなかには丁寧に面貌の細部まで描き込むものもあれば、輪郭のみで目鼻を缺いているものもあり、途中で描くのをやめているものも含まれる。これらが習作であることは疑いようもない。とすれば、同じく反故を利用して描かれた Stein painting 76 と P.2671V もまた、やはり同じ性質のものとみなしてよいのではなかろうか。

Stein painting 76 や P.2671V の白描畫が描かれた歸義軍期の敦煌では、民間の「畫行」と官府に屬する「畫院」が存在していたことは、指摘されてすでに久しい³²。それらには、「畫師」「畫匠」「畫人」といった職掌のあったことが、P.2049V、P.2032V などに記されており³³、組織としてある程度まとまった數の人材を擁していたことがうかがえる。そこでは見習工が先行作例を手本として寫しながら練習を重ねるということが、當然のことながら行われていたはずで、その際に反故も利用されていたのであろう。Stein painting 76 や P.2671V の白描畫は、こうした畫工組織における習作の一つであったと考えられるのではないか。

テキストにおける習字が同一字の羅列といった判別しやすい特徴を有するのとは異なり、白描畫についてはこれまで、圖の反復などにより習作であることが明らかなもの以外は、概ね壁畫の粉本すなわち下繪としての意味合いをもつものと理解される傾向にあった。しかしながら、Stein painting 76 と P.2671V の検討からは、圖の反復がみられない白描畫の中にも習作が含まれていること、さらに白描畫には壁畫制作の準備段階で作成されたものだけでなく、既存作例を寫したものも含まれていることがうかがえ、とくに反故を利用して描かれたものについてはその可能性が高いことが指摘できよう。これら練習目的の習作については、あくまでそれ以前に存在していた壁畫や絹本畫の圖相を伝えるものとして理解すべきであって、壁畫を描く際の粉本として使用されたと考えるのは、主客轉倒であろう。

おわりに

以上、小論で考察してきたところをまとめると、以下のようになろう。

・Stein painting 76 は、手紙文書「甲戌年四月沙州丈人鄧定子妻鄧慶連致肅州僧李保祐狀」の内容から 914 年ないしは 974 年以降に、P.2671V の白描畫は、その

³²敦煌における畫院の存在について、最初に注目されたのは向達氏である。向達「敦煌藝術概論」(『文物參考資料』第 2 號第 4 期、1951 年)。敦煌の畫行および畫院については、姜伯勤「敦煌的『畫行』與『畫院』」(『敦煌藝術宗教與禮樂文明』中國社會科學出版社、1996 年、13-31 頁)に詳しい。

³³前掲注 32 姜論文。

下に抄書された甲辰年の僧録に「靈圖寺比丘龍辯」とあることから 884 年以降に、それぞれ描かれたと考えられる。

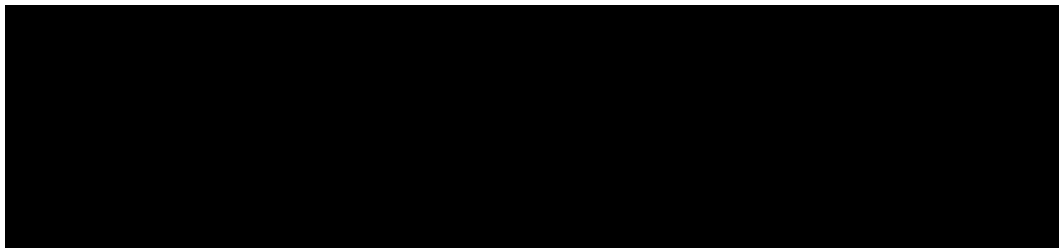
- Stein painting 76 と P.2671V の白描畫に現れる十六觀圖と未生怨因緣圖を、他の現存する壁畫や絹本畫と比較すると、十六觀圖は盛唐期にすでに出現していた圖像を、未生怨因緣圖は中唐吐蕃期に出現していた圖像を受け継いでいることが指摘できる。

- Stein painting 76 と P.2671V は、圖像に新奇性がなく、描寫が粗略で、とくに Stein painting 76 では配置を無視した描き方がなされていることから、これらはいずれも壁畫の下繪ではなく、既存の作例を寫し取ったものと解される。

- 敦煌地域における壁畫と絹本畫には共通性がみられることから、Stein painting 76 と P.2671V が寫す際に手本としたのは、壁畫ではなく絹本畫であった可能性も考えられる。

- Stein painting 76 と P.2671V の白描畫が文書の反故を利用して描かれているのは、手習いのための習作であったことを示す特徴の一つと考えられる。

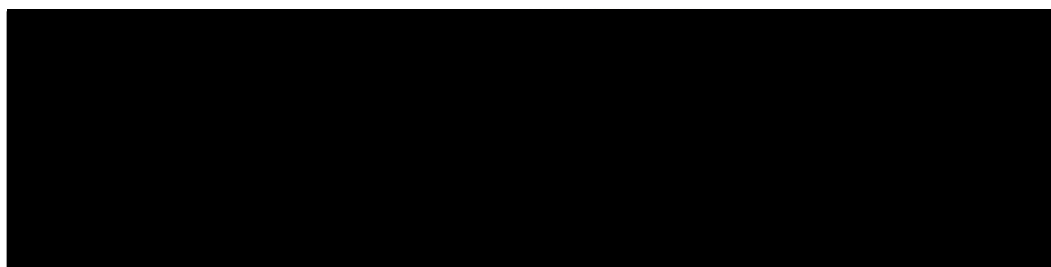
(作者は佛教大學佛教學部准教授)



〔第三紙 表〕

〔第二紙 表〕

〔第一紙 表〕



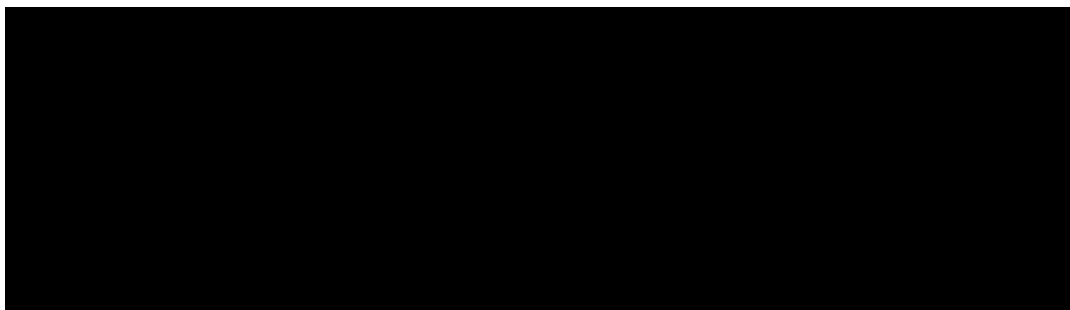
〔第一紙 背〕

〔第二紙 背〕

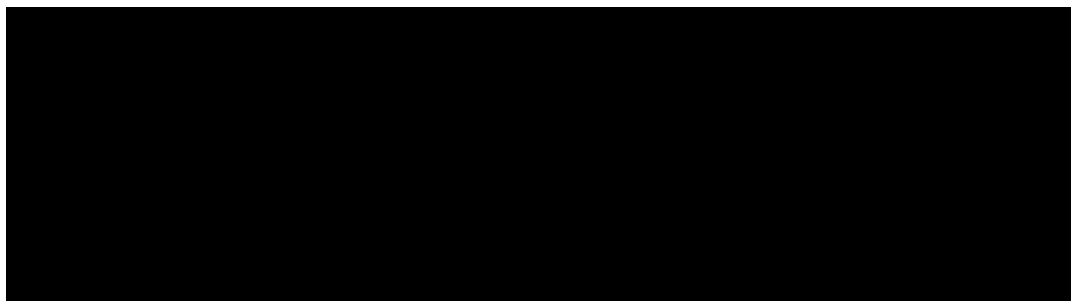
〔第三紙 背〕

圖：

（上）表面（下）背面



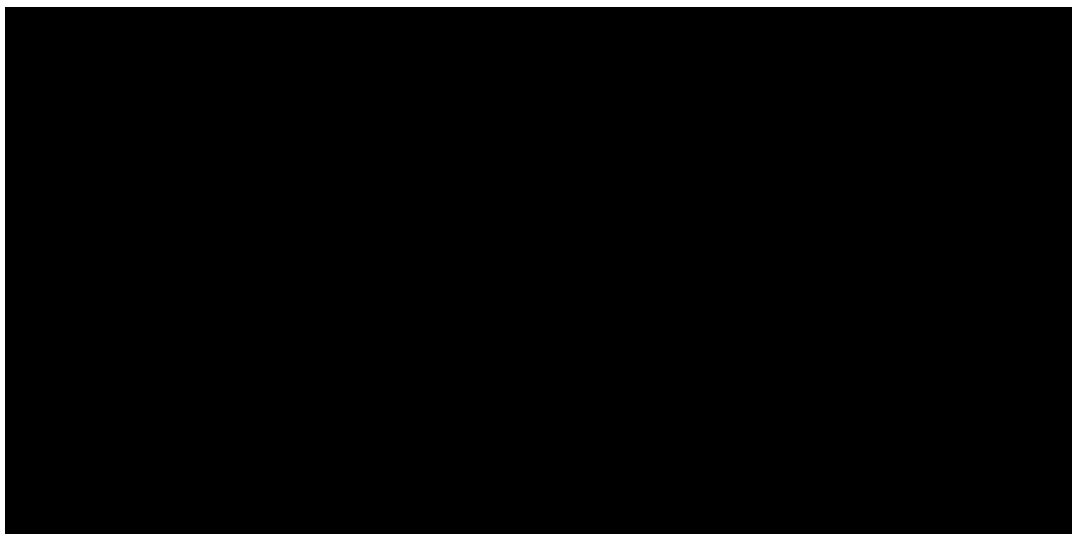
〔表面〕



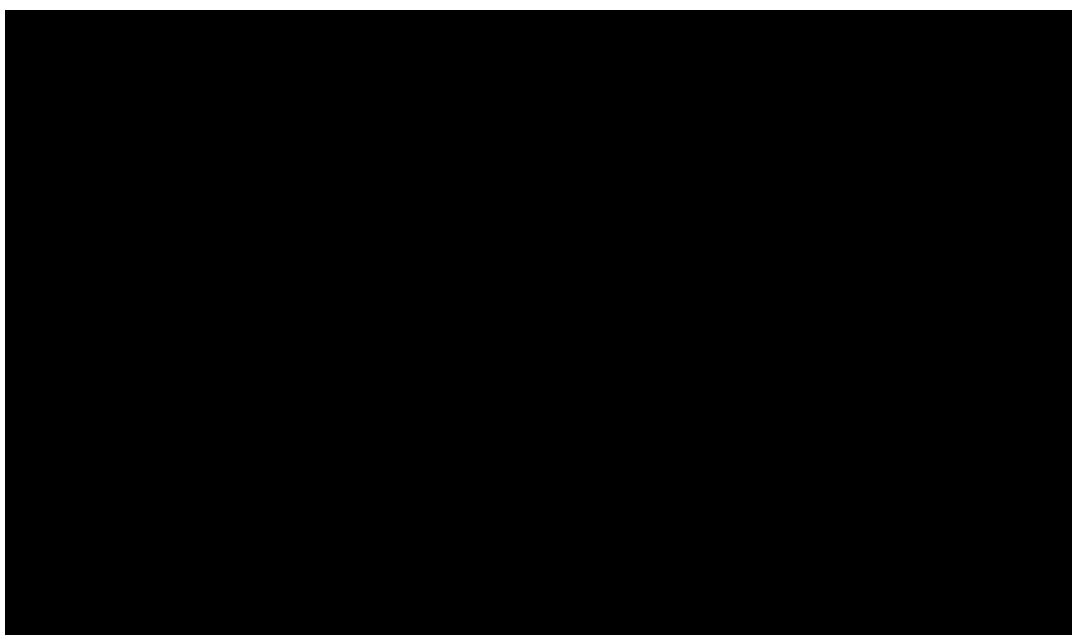
〔背面〕

圖：

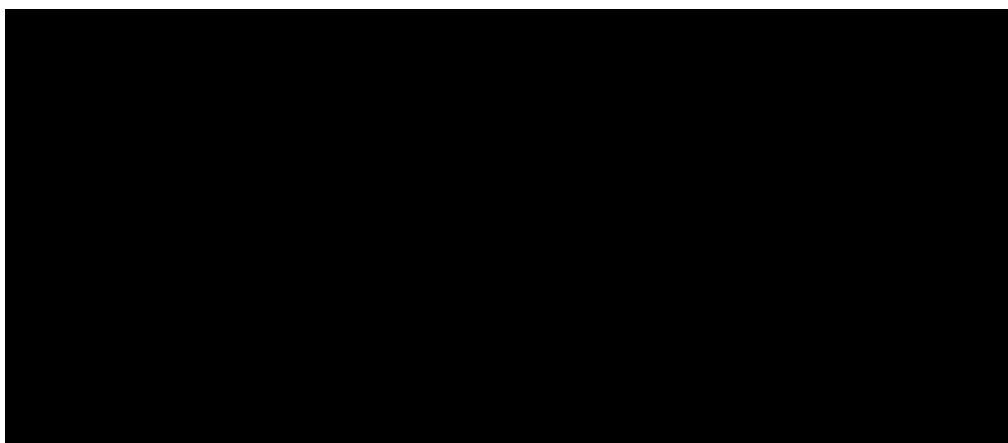
（上）表面（下）背面



圖：「天福捌年河西郡都僧統龍辯榜」



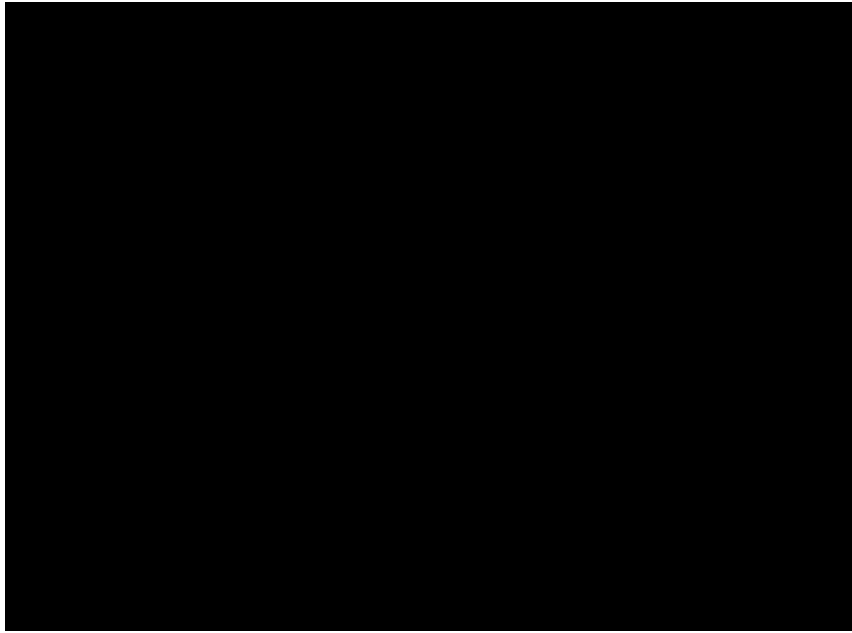
圖：佛說法圖



圖：寶池の圓輪（左） （右）莫高窟第 窟北壁



圖：寶幢（左上） （右上）莫高窟第 窟北壁
（左下） （右下）莫高窟第 窟北壁



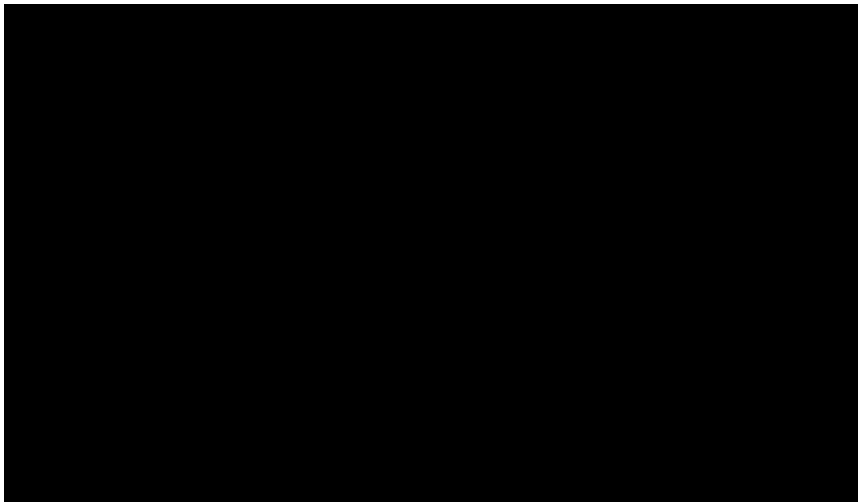
圖：僧形あるいは俗人形

(左上)

(左下)

(右) 莫高窟第

窟北壁



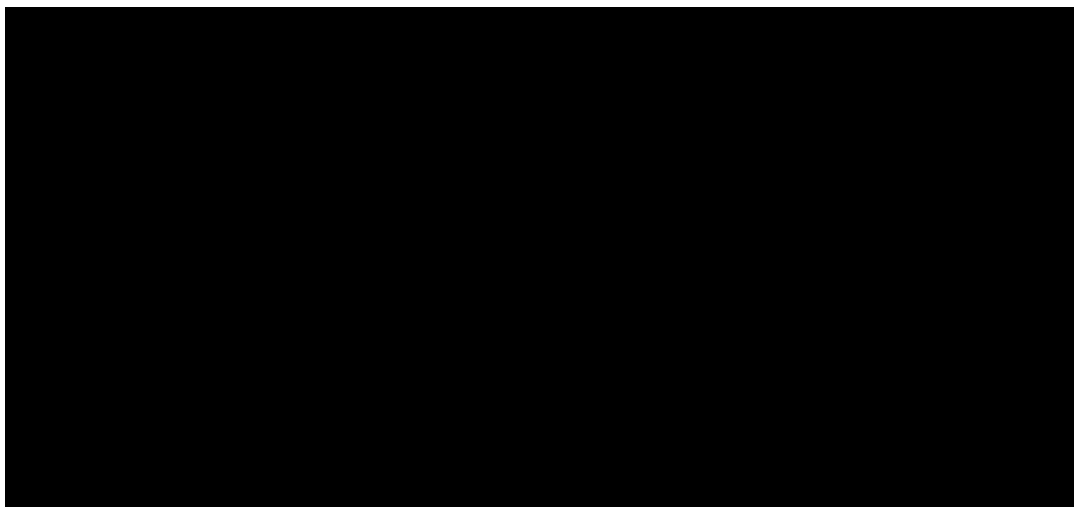
圖：寶池に群生する蓮華

(左)

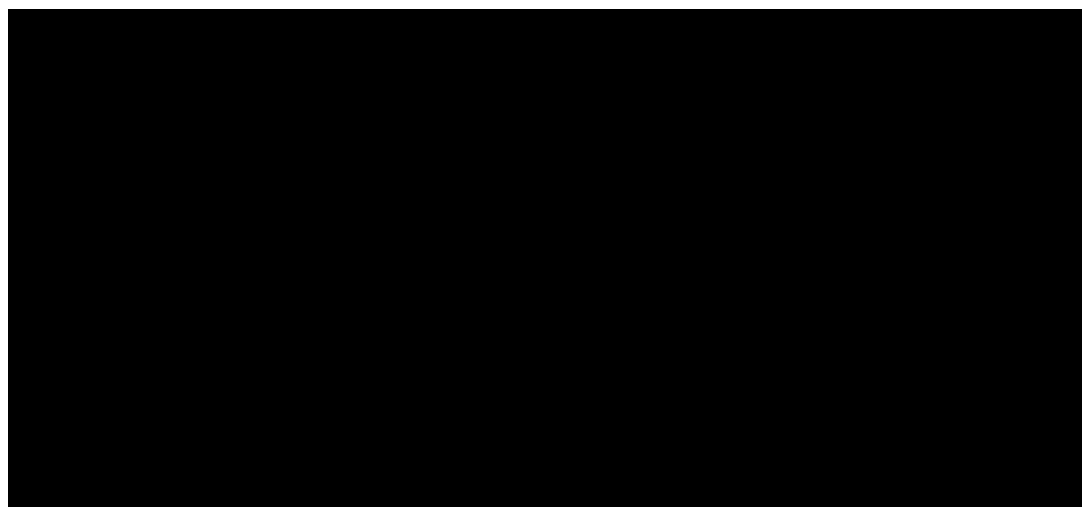
(右上)

(右下) 莫高窟第

窟北壁



圖：寶瓶（左） （右）莫高窟第 窟北壁



圖：湧雲（左） （右）莫高窟第 窟南壁

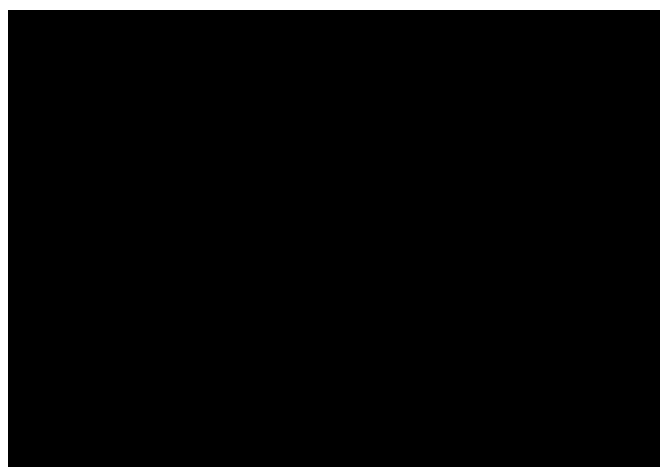


圖 1： 未生怨因緣圖部分

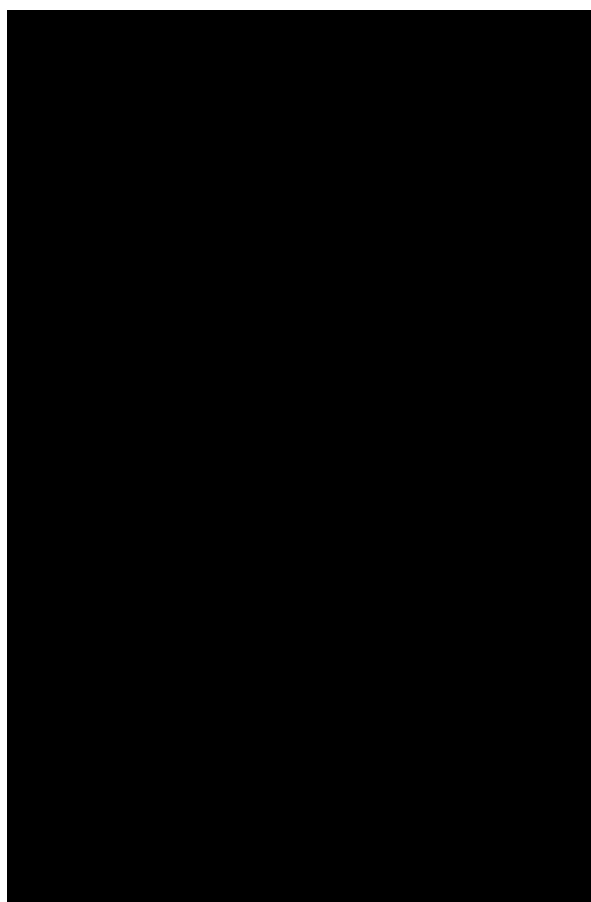


圖 2： 未生怨因緣圖部分

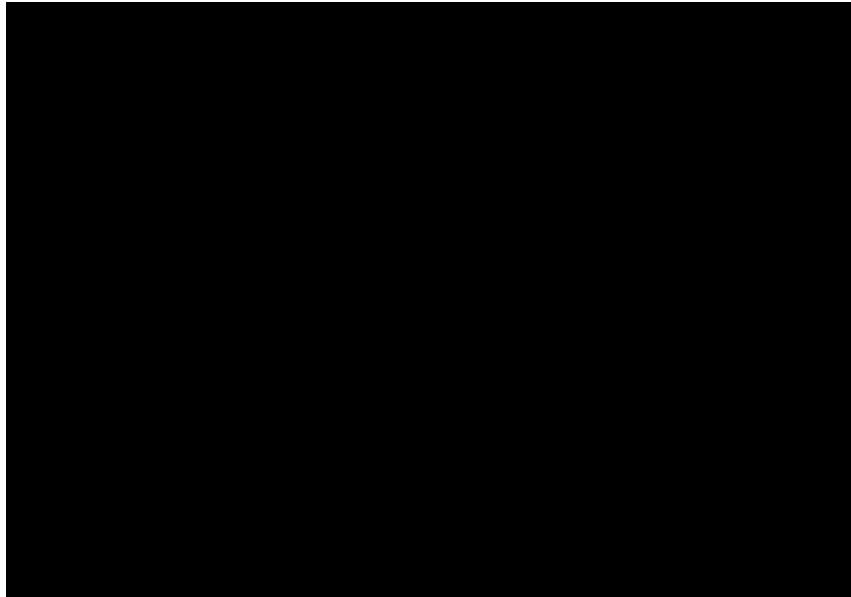


圖 〇：仙人と頻婆娑羅王の對面を主とする表現（楡 〇）

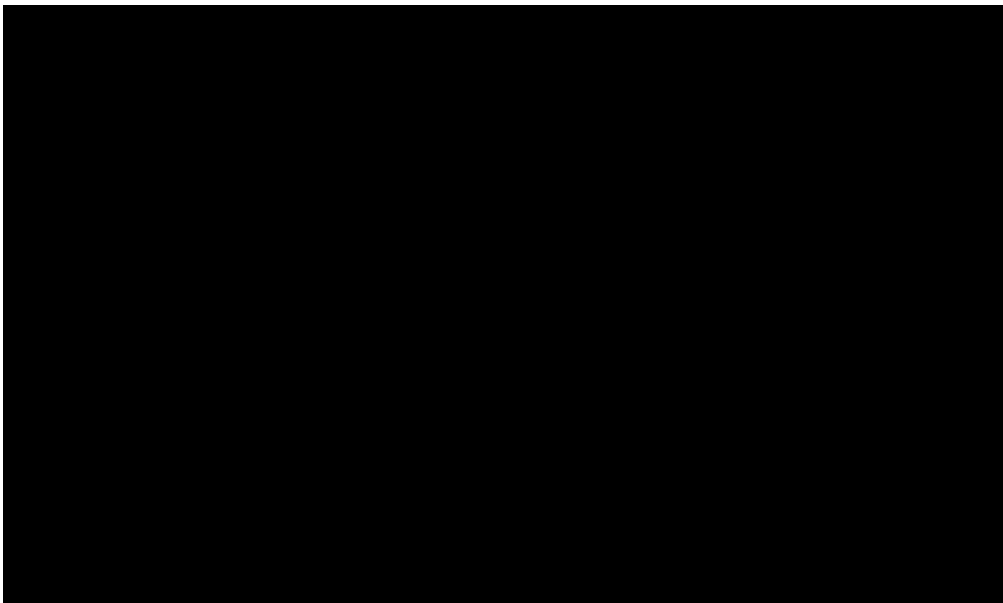


圖 〇：左 鷹狩による逐兔表現 右 仙人を斬殺せんとする表現（ 〇 ）

【圖版出典】

圖 1・6・7・8・10・11 (Stein painting 76) ©The Trustees of the British Museum

圖 2・5・6・7・8・9・12 (P.2671V) ©BnF/IDP

圖 3 ©The British Library/IDP

圖 4 *Serindia*, vol.4, pl.XCV

圖 5・6・7・8・9 (莫高窟第 320 窟北壁) 施萍婷主編『敦煌石窟全集 5 阿彌陀經畫卷』(香港：商務印書館、2002 年) 150 圖

圖 6 (莫高窟第 180 窟北壁) 筆者作成

圖 10 (莫高窟第 172 窟南壁) 筆者作成

圖 13 施萍婷主編『敦煌石窟全集 5 阿彌陀經畫卷』(香港：商務印書館、2002 年) 206 圖

圖 14 『西域美術 ギメ美術館ペリオ・コレクション I』(東京：講談社、1994 年) 圖 19

時代		盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	盛唐	
年代													8～9世紀	
窟主														
窟號/作品番號		莫172	莫172	莫320	莫180	莫116	莫118	莫91	莫117	莫126南	莫126北	莫188南	莫188北	Stein painting 37
畫面形式		條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅
場面數		16	16	16	16	5	16	7(現状)	8	14(現状)	16	16	16	10(現状)
經文に合致するもの	(1)日想觀	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	(2)水想觀	○○	○○	○○	○	○	○○○	○	○	○○	○○	○	○	○
	(3)寶地觀							○	○				○	○
	(4)寶樹觀	○	○	○	○		○○○	○	○	○	○	○	○	○
	(5)寶池觀						△	△	○	○		○	△	○
	(6)寶樓觀	○(雲あり)	○(雲あり)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	(7)華座觀						△	○				○		○
	(8)像觀 (9)眞身觀					○	○○		○	○		○○	○○	○○
	(10)觀音觀 (11)勢至觀	○○	○○	○○	○○					○○	○○	○○	○○	○
	(12)普觀										△			
	(13)雜觀	○	○	○	○					○		○	○	
(14)(15)(16)三輩往生		○○○	○○○	○○○	○○○						○○○	○	○○○	
經文に合致しないもの	第一群	(a)寶池の圓輪	●	●	●	●				●	●	●	●	
		(b)寶幢			●	●			●	●	●			
		(c)僧形或いは俗人形	●	●	●	●		●			●	●		
		(d)寶池に群生する蓮華	●	●	●	●		●					●	
		(e)寶瓶	●	●	●	●		●		●	●			
		(f)未開敷蓮華												
		(g)開敷蓮華				●		●						
		(h)寶珠	●	●										
	第二群	(i)寶帳												
		(j)塔												
	第三群	(k)湧雲												
(l)香爐														
その他	不明 缺損					○				○		○○		

表1 盛唐期の十六觀圖

時代	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	吐蕃	
年代												839					8世紀後半	9世紀初め	9世紀初め	9世紀前半	9世紀カ	9世紀カ	
窟主												陰嘉政		張氏		索氏							
窟號/作品番號	楡25	莫129	莫201南	莫201北	莫197	莫134	莫191	莫44	莫358	莫154	莫200	莫231	莫237	莫159	莫360	莫144	MG.17672	Stein painting 35	EO.1128	Stein painting 70	Ch.lv.0018	Ch.lv.0047	
畫面形式	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條+屏	屏風	屏風	屏風	屏風	屏風	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	
場面數	15(現状)	16	16	16	16	5	9(現状)	16	13	11	15	16	16	11(現状)	16	16?	11(現状)	15(現状)	16	14(現状)	15	11	
經文に合致するもの	(1)日想觀		○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	
	(2)水想觀	○	○○○	○○	○○	○	○	○	○○○	○	○○	○○	○○	○○	○○	○○○	○○	○○	○○○	○○○	○○	○○	
	(3)寶地觀		○			△					○		○○					○				○	
	(4)寶樹觀	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	(5)寶池觀	○	○		△	○		○	○	○		○	△		○		○	○			○	○	
	(6)寶樓觀	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○		○		○	○	○	○	○	
	(7)華座觀	○				○	○	○				○						○	○	○	○	○	
	(8)像觀 (9)眞身觀		○			○○	○		○	○		○	○		○	○	○	○○	○	○○	○	○	
	(10)觀音觀 (11)勢至觀		○○	○○	○○	○○		○	○○		○	○○	○○	○○		○○	○	○	○	○○	○○	○	
	(12)普觀	△		○		○				○					△(三尊)	△(三尊)	△(三尊)		○	○	○		
	(13)雜觀	○	○	○	○		○	○				○			○			○	○○		○		
	(14)(15)(16)三輩往生	△	○○○		○○○	○○○			○○○			○○○	○○○	○○○			○○	○				○	
	經文に合致しないもの	(a)寶池の圓輪	●			●				●	●	●	●		●		●			●	●(寶池なし)	●	●
		(b)寶幢				●			●	●	●	●	●			●	●		●	●	●	●	●
(c)僧形或いは俗人形		●		●●	●		●						●			●			●			●	
(d)寶池に群生する蓮華		●		●●	●						●		●	●		●							
(e)寶瓶		●		●			●			●	●			●					●				
(f)未開敷蓮華		●						●	●	●					●●		●	●●	●				
(g)開敷蓮華		●							●	●													
(h)寶珠		●	●	●●	●						●												
(i)寶帳									●	●							●	●		●			
(j)塔																●							
その他	(k)湧雲																						
	(l)香爐																						
	不明 缺損 没山出宮						○				○			○○	○○	○○○	○○	○			○		

表2 中唐吐蕃期の十六觀圖

時代	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍	歸義軍
年代	865			962頃				10世紀初	10世紀				10世紀	914/974以降	884以降
窟主	索義弁														
窟號/作品番號	莫12	莫18	莫19	莫55	莫76	楡35	莫141	MG.1767 3	Ch.0051	Ch.lv.004 7	Ch.lvi.0018	Ch.v.001	Stein Painting 76 (白描)	P. 2671V (白 描)	
畫面形式	屏風	屏風	條幅	條幅	條幅	條幅	條幅	橫長	條幅			條幅	條幅	條幅	條幅
場面數	16	12? (現状)	8 (現状)	16	11 (現状)	16	7	9	15 (現状)	11	15	11 (現状)	14 (現状)	15	
經文に 合致するもの	(1)日想觀	○			○	○	○			○	○	○	○	○	△
	(2)水想觀	○○	○○○	○○	○○	○	○○○	○	○	○○	○○		○○	○	
	(3)寶地觀								○	○		○			
	(4)寶樹觀	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	(5)寶池觀	○	○				○		○		○				
	(6)寶樓觀	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
	(7)華座觀	○					○								
	(8)像觀 (9)眞身觀	○							○○○○○	○	○	○○			
	(10)觀音觀 (11)勢至觀	○	○		○○	○○	○	○○	○○	○	○○	○○	○○	○○	○○
	(12)普觀	○									○		○		
	(13)雜觀				○		○	○			○			○	
	(14)(15)(16)三輩往生				△△									△△△	
經文に 合致しないもの	(a)寶池の圓輪	●		●	●	●	●			●	●		●	●	
	(b)寶幢	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	(c)僧形或いは俗人形				●	●	●	●		●	● (未開敷蓮華に 包まれる)	●	●	●	●
	(d)寶池に群生する蓮華				●		●						●	●	●
	(e)寶瓶	●			●	●	●							●	
	(f)未開敷蓮華	●	●		●		●●								
	(g)開敷蓮華	●				●	●●	●							
	(h)寶珠			●			●								
	(i)寶帳	●	●						●						
	(j)塔														
	(k)湧雲														● (6)寶樓觀の 一部?
その他	不明		○○			○							○ (寶池?に 樂器)	○	
	缺損			○					○○○		○		○	○	

表3 歸義軍期の十六觀圖

年代		作品番號／窟番號	仙人殺害				馬上逐兎	
			對面	拘引	斬殺	草庵	鷹	騎馬人物
中唐吐蕃期 (786～848)	8～9世紀	Steing painting 37 (Ch. 00216)	△ (仙人のみ)			○	×	△ (兎のみ)
		楡25	○			○	×	×
		莫358			○	○	×	○
	8世紀末～9世紀初	MG. 17669	不明		不明	不明	×	○
	9世紀初	Steing painting 35 (Ch. lvi. 0034)	○			○	○	○
	9世紀前半	E0. 1128			○	○	○	○
歸義軍期 (851～1002)		楡35	不明		不明	○	不明	不明
		楡38	○			○	不明 (圖版缺)	不明 (圖版缺)
	10世紀初	MG. 17673			○	×	○	○
		Ch. lv. 0047			○	○	○	○
		Ch. lvi. 0018			○	不明	○	○
884以降		P. 2671V		○		○	×	○
914/974以降		Stein painting 76			○	○	○	○

※絹本畫の制作年代については、大英博物館およびギメ東洋美術館の推定に従う。

※Ch. lv. 0047とCh. lvi. 0018は、ニューデリー國立博物館所藏。

表4 未生怨因縁圖の圖像表現